つては、士清は學者としてよりは、むしろ思想家として多く說明されてをり、從つて書紀通證、倭訓栞等を學術的勞作として考察することはなく、たゞ彼の思想理解のために引用せらるゝのみであるが、これは士清の學問傾向によると共にまた著者が彼の思想的息吹のもとにあるより來るものであらう。

本書において、斯く、士清の學問は特色あるものとして、種々方面より說かれてゐる。ひとつの特質を明らかにするとは同時に他を見ることである。著者の國學研究が本書を基點としてよき展開を遂げらるるを期待すべきであらう。（東京湯川弘文社發行、菊二六一頁、挿繪三一圖、定價貳圓八拾錢）（藤）

○寺院經濟史研究　日本宗教史研究會編

我國の社會經濟史研究が隆盛になつてから最早や數年を經過してゐる。試みに本年度各大學の國史學科卒業論文を見てもその一斑を窺ひ得る如く、國史學界に於いて所謂社會經濟史の研究論著は壓倒的優位を占めつゝある現況である。而してこゝに、この方面の俊秀なる新進學徒によつて組織されてゐる日本宗教史研究會は、先にその研究の成果を世に問ひし第一輯に續いて、寺院經濟史に關するものを集錄し、「日本宗教史研究第二輯」として公刊するに至つたのである。是亦斯界隆運の波に乘ると共に益々その趨勢を進めるものであらう。

本書の內容を一瞥するに――竹內理三氏の「成功・榮爵考」は、そのサブタイトル「日本寺院經濟史の一節として」が示す如く、成功・及び榮爵を寺院經濟と關聯せしめ、幾多の事例を援引して之を究明してゐる。寶月圭吾氏の「中世興福寺領に於ける用水の統制」は、用水系統の地理的考察、用水統制の內容、用水統制の崩壞等の章に分ちて、庄園統制上重要なる意味を有する用水統制權が、庄園領主たる興福寺の統制を離れて、次第に强力なる豪族の手に掌握されて行く過程を論じてゐる。中村吉治氏の「田地に神木を立てること」は、興福寺に於て領內農村を差押へる爲に神木を用ひた例を擧げて從來看却されてゐた神木の經濟史上有する意義を闡明し、並に點札と神

木との關係に論及してゐる。小野晃嗣氏の「興福寺騙座の研究」は、寛正より文明年間に至る頃の興福寺の大乘院一乘院に依存する騙座の分析に主力を注ぎ、更に文明以後織豐時代座が廢止されるに至る迄の、政治的經濟的變遷に伴ふこれら座衆の推移を時代的に論述してゐる。最後に阿部眞琴氏の「明治維新に於ける社寺領の處分」は先づ信長秀吉の時代から江戸時代各藩に行はれた寺院領削減、排佛論を說き、明治維新の排佛毀釋それに隨伴せる土地問題を究明して、こゝにも亦明治維新全體の持つ性質が窺はれると結んでゐる。

以上五篇の論文を通じて、その例證の擧出に於て、數字的統計的研究に於て殆んど間然する所なき程詳密に亙つてゐる點は近時斯界の動向を示すものであり我々の深く敬服する所である。又五篇の內、寶月、中村、小野三氏が共に中世の興福寺を中心に取扱つて居らる事は、偶然の一致とも言へようが、又大乘院寺社雜事記刊行の意義を深からしめるものでもあらう。

本書は宗教復興の角笛高らかに鳴り渡る秋、宗教乃至寺院の本質理解に對して貢獻せん爲公にされたといふ。而してこの書によつて寺院の經濟的社會的方面は深く深く下げられてゐる。唯我々は望蜀の謗を免れないかも知れぬが、更にこの寺院の有する社會的經濟的側面が如何に緊密に本來の宗教的思想的側面と關聯してゐるかを究明して欲しいと望むのである。（菊判三三四頁、東京三敎書院發行、定價壹圓八拾錢）（時野谷）

○朝鮮の姓名氏族に關する研究調査

今村鞆著

朝鮮總督府中樞院に於てはその事業の一として夙に朝鮮舊來の風俗慣習の調査を行ひ、その業績は「朝鮮婚姻の研究」「朝鮮人の親族範圍」等の書となつて旣に幾多公にせられてゐるが、此度刊行せられた標記の書は專ら朝鮮の姓名及氏族に關する諸事項に就いてその現狀を主とし、併せてその歷史的沿革をも記述考證したもので一に同院囑託今村鞆氏の筆になるものである。

由來朝鮮に於ける人名の稱呼は、古くは固有の命名法